

---

SATO Label Gallery TruePro

# GalleryWatch

Sato International Pte Ltd

日本語版

Version SI-040603-06

Copyright © 2004-2005 Sato International Pte Ltd  
All rights reserved.

# 目次

<b>1. はじめに</b>	<b>1-1</b>
1.1 GalleryWatch について .....	1-1
1.2 本マニュアルについて .....	1-2
1.2.1 本マニュアルで使用される規則 .....	1-2
<b>2. 参照</b>	<b>2-1</b>
2.1 メインウィンドウ .....	2-1
2.2 ファイルメニュー .....	2-2
2.2.1 新規作成 .....	2-2
2.2.2 開く .....	2-2
2.2.3 保存 .....	2-2
2.2.4 名前を付けて保存 .....	2-2
2.2.5 閉じる .....	2-3
2.2.6 終了 .....	2-3
2.3 実行メニュー .....	2-3
2.3.1 スタート/ストップ .....	2-3
2.3.2 ファイルトリガー追加 .....	2-3
2.3.3 E-mail トリガー追加 .....	2-4
2.3.4 COM のトリガーを加える .....	2-4
2.3.5 TCP/IP のトリガー追加 .....	2-4
2.3.6 トリガーの編集 .....	2-4
2.3.7 トリガーを削除 .....	2-32
2.4 表示メニュー .....	2-33
2.4.1 ツールボックス .....	2-33
2.5 オプションメニュー .....	2-33
2.5.1 環境設定 .....	2-33
2.6 ツールメニュー .....	2-35
2.7 ヘルプメニュー .....	2-35
2.7.1 内容 .....	2-35
2.7.2 Label Gallery on the web .....	2-35
2.7.3 バージョン情報 .....	2-35
2.7.4 使用できないヘルプトピック .....	2-36
2.8 GalleryCommand .....	2-36
2.8.1 LABEL .....	2-36
2.8.2 LABELCLOSE .....	2-37

2.8.3	SET .....	2-37
2.8.4	SETPRINTPARAM .....	2-37
2.8.5	COMMENT .....	2-38
2.8.6	PRINT .....	2-38
2.8.7	PORT .....	2-39
2.8.8	PRINTER.....	2-39
2.8.9	PRINTJOBNAME.....	2-40
2.8.10	LOGIN.....	2-40
2.8.11	RETURN.....	2-40
2.8.12	QUIT .....	2-40
2.8.13	MESSAGEBOX.....	2-40
2.8.14	CREATEFILE.....	2-40
2.8.15	DELETEFILE .....	2-41
2.8.16	SESSIONSTART.....	2-41
2.8.17	SESSIONPRINT .....	2-41
2.8.18	SESSIONEND .....	2-41
2.8.19	OEMTOANSI .....	2-41
2.8.20	SETDATABASE .....	2-42
2.8.21	SETTABLE.....	2-42
2.9	コマンドラインパラメータ .....	2-43

### 3. 用語集

**3-A**

# 1. はじめに

## 1.1 GalleryWatch について

GalleryWatch は、SATO Label Gallery TruePro ソフトウェアパッケージに含まれるツールです。GalleryWatch を使用すれば、WYSIWYG スタイルで簡単にラベルを作成および印刷することができます。GalleryWatch の提供するイベントにより、ラベル生成プロセスにおける通信や同期化が可能になります。1 つ以上のイベントが発生すると、定義済みのアクションが実行されます。

GalleryWatch で実行できる操作は以下のとおりです。

- Label Gallery を実行し、トリガーファイルのプロパティ、E-mail の受信、TCP/IP ソケット接続、または COM ポートアクティビティなどにおいてラベルを操作します。これらのアクティビティはトリガーイベントと呼ばれ、GalleryWatch にアクションの実行を起動させるための信号です。
- 最新インターネット技術を使用して TCP/IP ソケット接続またはテキストベース E-mail によりラベルデータを送信します。そのため、移動の多いユーザでも、どこからでも任意のプリンタでラベルを印刷することができます。
- トリガーイベント(例: ラベルを開く、ラベル発行、コマンドをジョブファイルに保存する)が発生した場合、GalleryCommand を Label Gallery に送信します。GalleryCommand により、ラベルデータと印刷をより効果的に管理することができます。
- 例外的なデータストリームからラベル変数に、データを容易に解析してマッピングします。構造化されていないデータソースから簡単にデータを抽出し、ラベル上の変数フィールドに移します。

- もっとも効率の高い方法で、携帯ワイヤレスデバイスからのラベル発行を実現します。ラベルは、そのまま携帯デバイスで印刷するか、リモート印刷サーバで印刷することができます。
- 各トリガーイベントに特定のアクションにより、最大 50 イベントをモニタできます。GalleryWatch は、混在するトリガーイベントを同時にモニタすることができます。
- イベント発生時にデータファイルを操作します。

---

## 1.2 本マニュアルについて

このユーザマニュアルは 1 つの章により構成されています。本プログラムのさまざまなオプションやダイアログを説明するリファレンスです。

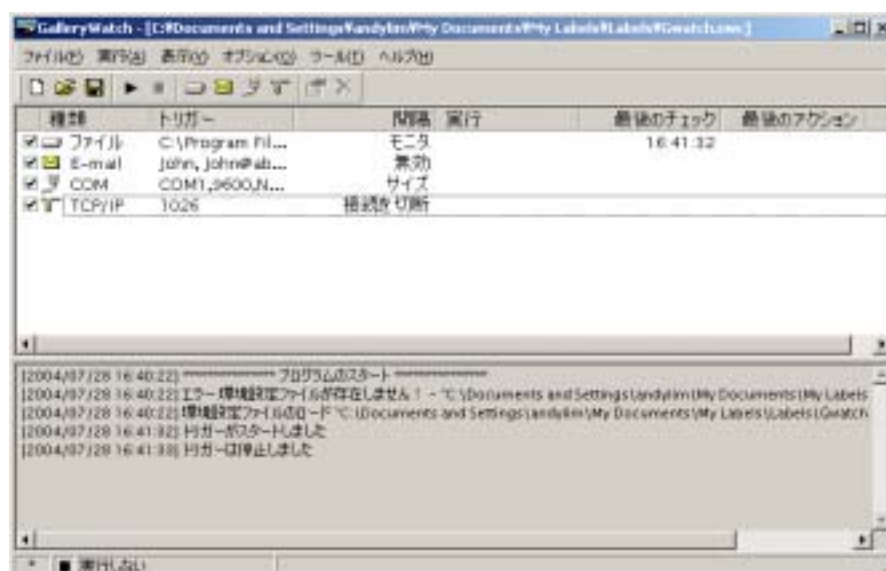
### 1.2.1 本マニュアルで使用される規則

- 太字で表示されるテキストは、メニューやボタンなどのクリックが可能なアイテムの名前を表します (OK ボタンなど)。
- 斜体で表示されるテキストは、オプションや確認アクションを表します (*読み取り専用* など)。
- 括弧で囲まれたテキストは、PC キーボードのキーを表します (<Enter> など)。

## 2. 参照

### 2.1 メインウィンドウ

起動後、通常のプログラム操作では以下のウィンドウが表示されます。



GalleryWatch メインウィンドウ

ウィンドウのメインエリアには、現在有効になっているトリガーイベントとそれらのプロパティが表示されます。各トリガーは、トリガー名の左側にチェックを入れて有効または無効にすることができます。

下のエリアはログ領域です。ここには、過去のアクティビティの説明が表示されます。ログを使用して、発生したイベントの種類やエラーを確認することができます。ここには、GalleryWatch のアクティビティに関するその他の重要な情報も表示されます。

ログ領域の下にはステータスバーがあります。ステータスバーには、GalleryWatch プログラムに関する一般情報が表示されます。

メインウィンドウの上部にはメニューバーとショートカットツールバーがあります。メニューバーには、すべてのコマンドがメニューとして論理的に並べられており、ショートカットツールバーには、使用頻度の高いコマンドのアイコンがあります。これらのバーは移動可能です。画面上で自由に配置することができます。GalleryWatch のメインウィンドウ内に固定するか、または、メインウィンドウ外で自由に移動させることができます。

ウィンドウのタイトルバーには、現在アクティブになっている環境設定ファイルが表示されます。

---

## 2.2 ファイルメニュー

GalleryWatch のすべての設定は、拡張子.NWC が付いた環境設定ファイルに保存されます。多様な設定を複数の環境設定ファイルにまとめて保存することができます。新規の設定ファイルをアクティブにするには、そのファイルを File-Open コマンドで開きます。最後に開いた.NWC ファイルが記憶され、次に GalleryWatch を起動するとこれが自動的に開きます。環境設定ファイルの名前は、GalleryWatch 実行可能ファイルのコマンドラインパラメータとして使用することもできます。

これらの環境設定ファイルには、すべてのトリガーイベントと、そのイベントが実行されると実行されるアクションについての指示が保存されます。

### 2.2.1 新規作成

新規の(空の)環境設定ファイルを作成します。

### 2.2.2 開く

既存の環境設定ファイルを開き、このファイル内の設定をアクティブにします。GalleryWatch は、このファイルに含まれるトリガーイベントに回答し、処理するようになります。

### 2.2.3 保存

現在開いている環境設定ファイルを保存します。環境設定ファイルの変更を保存する場合に使用します。

### 2.2.4 名前を付けて保存

現在開いている環境設定ファイルを別のファイルとして保存します。

### 2.2.5 閉じる

GalleryWatch の管理ウィンドウを非表示にします。このウィンドウを閉じても、GalleryWatch はバックグラウンド実行されており、アクションのトリガーを待機しています。

### 2.2.6 終了

GalleryWatch を終了します。



## 2.3 実行メニュー

### 2.3.1 スタート/ストップ

このコマンドは、イベントの処理を開始または停止します。停止すると、GalleryWatch によりイベント(ファイルの変更、E-mail、シリアルポートアクティビティ、TCP/IP ソケットのモニタなど)がチェックされなくなるため、イベントが発生してもアクションは実行されません。このコマンドは、アプリケーションを終了せずに GalleryWatch のオン/オフを切り替える主スイッチとして使用できます。

イベント処理がアクティブな場合、ステータスバーのアイコンが緑色になり、**アクティブ** という文字が表示されます。


GalleryWatch アプリケーションを終了すると、この設定は保存されません。GalleryWatch は常に実行モードで起動されるため、イベント処理がアクティブになります。

イベント処理を素早く開始するには  ショートカットアイコンをクリックし、処理を停止するにはショートカットアイコン  をクリックします。この2つのショートカットはツールバーから使用できます。

### 2.3.2 ファイルトリガー追加

新規のファイルトリガーイベントを追加します。**実行を編集する** ダイアログボックスが表示されます。ここでは、このトリガーに関する様々なオプションを設定することができます。


ファイルトリガーオプションの設定については、**実行を編集する** ダイアログの **ファイル** タブを参照してください。

ツールバーの  ショートカットアイコンをクリックして、このコマンドを使用することもできます。

### 2.3.3 E-mail トリガー追加

新規の E-mail トリガーイベントを追加します。**実行を編集する** ダイアログボックスが表示されます。ここでは、このトリガーに関する様々なオプションを設定することができます。


ファイルトリガーオプションの設定については、**実行を編集する** ダイアログの **E-mail** タブを参照してください。

ツールバーの  アイコンをクリックして、このコマンドを使用することもできます。

### 2.3.4 COM のトリガーを加える

新規 COM ポートトリガーイベントを追加します。**実行を編集する** ダイアログボックスが表示されます。ここでは、このトリガーに関する様々なオプションを設定することができます。


ファイルトリガーのオプションの設定については、**実行を編集する** ダイアログの **COM ポート** タブを参照してください。

ツールバーのショートカット  をクリックして、このコマンドを使用することもできます。

### 2.3.5 TCP/IP のトリガー追加

新規の TCP/IP トリガーイベントを追加します。**実行を編集する** ダイアログボックスが表示されます。ここでは、このトリガーに関する様々なオプションを設定することができます。

ファイルトリガーオプションの設定については、**実行を編集する** ダイアログの **TCP/IP** タブを参照してください。

ツールバーの  ショートカットアイコンをクリックして、このコマンドを使用することもできます。

### 2.3.6 トリガーの編集

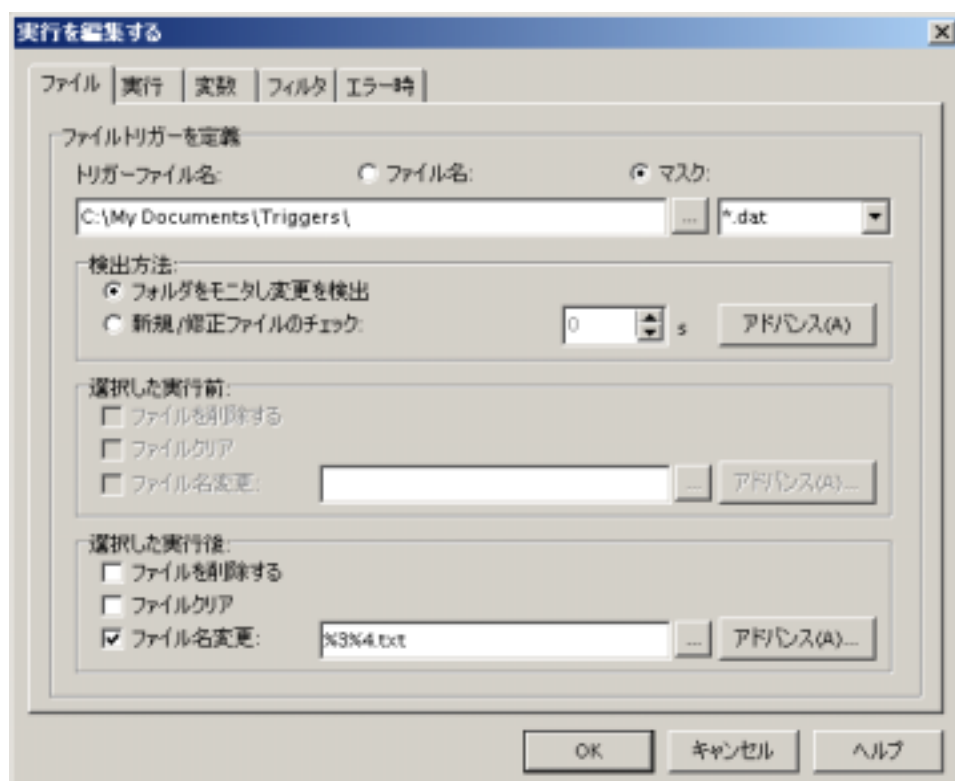
現在選択しているトリガーを編集します。イベントのプロパティを素早く参照するには、メインウィンドウでイベント名をダブルクリックします。

表示されるトリガー設定の編集用ダイアログボックスには、すべてのトリガーに共通するタブと、現在選択しているタイプのトリガーのみに関連するタブがあります。通常、選択しているトリガーに関連するタブは最初のタブのみで、残りの 3 つのタブはすべてのトリガーに共通するタブです。

既存のトリガーを編集する場合だけでなく、新規のトリガーイベントを追加する場合にもこのダイアログが表示されます。

### ファイル タブ

ファイルトリガーイベントで使用されるオプションは、このタブにあります。ファイルトリガーイベントが発生するのは、指定されたファイルが変更された場合（つまり、ファイル修正時間に変更された場合）です。例えば、このタイプのイベントを使用すると、ネットワークに接続されている、Windows OS 以外の OS を使用するコンピュータにラベル発行を同期させることができます。このコンピュータのユーザがラベルを発行する際には、ネットワークディスクにある特定のファイルが変更されます。GalleryWatch がこのファイルをモニタし、ラベル発行を開始します。このネットワーク内のファイルはラベル発行のトリガーとしてのみ使用されますが、ラベルで直接使用可能なデータを含めることもできます。



実行を編集する: ファイル タブ

ファイルトリガーイベントで設定できるオプションは以下のとおりです。

**ファイルトリガー:** ここには、モニタ対象ファイルのフルパスを入力します。このファイルを変更すると、ファイルトリガーイベントが発生し、対応するアクションが実行されます。他のオプションを選択すると、トリガーディレクトリ全体で、指定したマスクが拡張子に含まれるファイルがモニタされま

す。使用頻度の高いファイル拡張子は GalleryWatch に事前定義されていますが、その他のファイルマスクを入力して使用することもできます。

### 検出方法

トリガーファイルが変更されたことを GalleryWatch が検知する方法は 2 つあります。最初の方法の、**フォルダをモニタし変更を検出** を選択すると、Windows OS がファイルの変更をモニタし、変更があれば GalleryWatch に通知します。プロセッサ時間を短縮し処理速度を向上できるため、この方法を推奨します。ただし、このオプションが有効になるのは、Windows OS が制御するディスク上にトリガーファイルが存在する場合に限られます。UNIX または NetWare ベースのマシンにトリガーファイルが存在する場合、この方法ではファイルの変更は検知されません。その場合、2 つ目のオプション **新規/修正ファイルのチェック** を選択する必要があります。この方法では、n 秒ごとにトリガーファイルがチェックされ、変更が検知されるとアクションが実行されます。

どちらのオプションを選択すればよいか判断できない場合は最初のオプションを選択し、この方法が機能しない場合にのみ 2 つ目のオプションを選択します。

**アドバンス:** ここでは、検出方法の詳細を設定することができます。

### 選択した実行前

ここでは、実行処理前のトリガーファイルに対する操作を指定することができます。このオプションを使用して、ラベル発行が開始したことを、ほかのアプリケーションや GalleryWatch 内のトリガーに通知することができます。

トリガーファイルに対して、**削除、クリア**(トリガーファイルの容量を 0 バイトにする)、または **名前の変更**の操作を実行することができます。

### 選択した実行後

ここでは、実行処理後のトリガーファイルに対する操作を指定することができます。このオプションを使用して、ラベル発行が完了したことを、ほかのアプリケーションや GalleryWatch 内のトリガーに通知することができます。

トリガーファイルに対して、**削除、クリア** (トリガーファイルの容量を 0 バイトにする)、または **名前の変更**を実行することができます。

**アドバンス:** ここでは、ファイル名変更の詳細を設定することができます。

以下も参照してください。

実行タブ

変数タブ

フィルタタブ

エラータブ

### アドバンス

ここでは、検知方法の詳細を設定することができます。

**トリガーファイルへは書き込みアクセスが必要:** トリガーファイルに対する書き込み権限が必要になります。イベントの開始後、トリガーアクションによりトリガーファイルが削除される場合、トリガーファイルに対する読み取り/書き込み権限を持っている必要があります。

**空のトリガーファイルは無視する:** トリガーファイルが空の場合 (ファイルサイズが 0 バイトの場合)、アクションは実行されません。これが有用になるのは、ラベル発行用のデータがトリガーファイルに含まれる場合です。ファイルが空の場合はファイルにデータが含まれていないため、ラベル発行をトリガーする必要はありません。

### 選択したアクションのアドバンス設定

**固定ファイル名** オプションにより、アクションの開始または終了時に使用されるファイルの名前を指定できます。3 つのドットが並んだボタンをクリックして既存ファイルを参照し、使用するファイルを選びます。

**変数ファイル名** オプションにより、各発行プロセスに対して個別に生成される変数ファイル名を指定できます。

最初に、ファイルを保存するフォルダの名前を選択します。3 つのドットが並んだボタンをクリックして、保存先のフォルダを開きます。次に、ファイル名を定義するために使用するコンポーネントを選択します。以下から選択することができます。

コンピュータ名

ユーザ名

日付

時刻

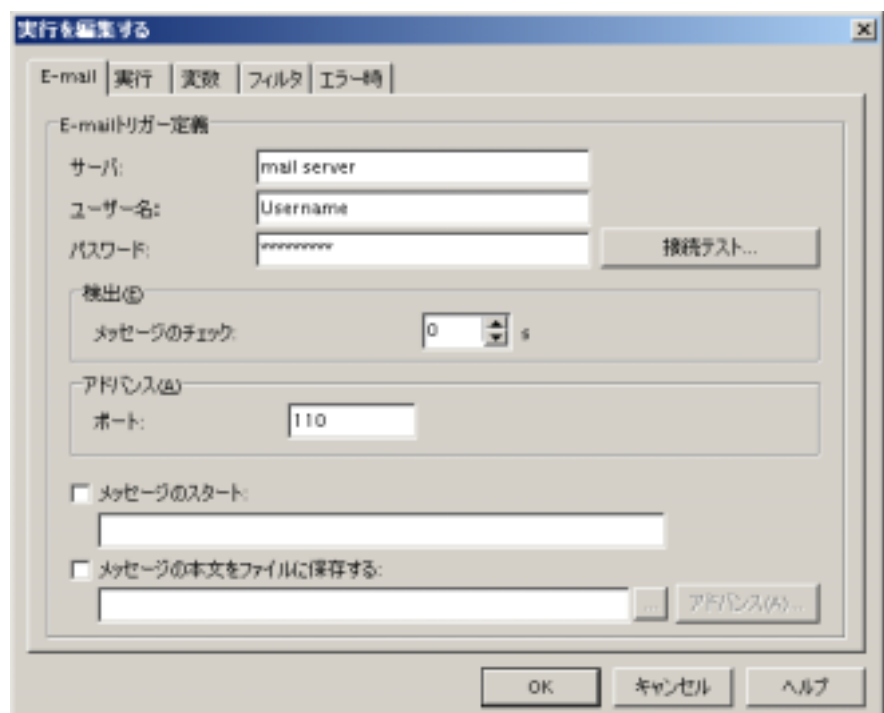
各コンポーネントの 属性の順序は変更することができます。順序を変更するには、右側にある上/下の矢印をクリックします。ファイル名に含めるすべてのコンポーネントにチェックマークを入れます。選択しなかったコンポーネントはファイル名には使用されません。

**カスタムファイル名** オプションにより、ファイル名のマスクを作成できます。ファイル名に可変コンポーネントを含めるには、上のテーブルの要領でそのコンポーネントを入力します。例えば、コンピュータ名には%1、ユーザ

名には%2 を使用します。ファイル名に変数を加えるには、:variable のように変数名の前にコロンを挿入します。その他のすべての文字は入力したとおりに使用されます。

### E-mail タブ

E-mail トリガーイベントで使用されるオプションは、このタブにあります。E-mail が受信されると、E-mail イベントがトリガーされ、定義済みのアクションが実行されます。E-mail の件名により、イベントをトリガーする E-mail を指定することができます。受信した E-mail の件名が **メッセージのスタート** フィールドに設定した件名と同じ場合、アクションが実行されます。それ以外の場合、アクションは実行されません。



実行を編集する: E-mail タブ

最初に、実行でモニタするメールアカウントを指定する必要があります。標準の POP3 メールアカウントのみをサポートします。これらの設定が分かりにくい場合は、システム管理者に確認してください。

**サーバ:** メールサーバ名またはその IP アドレスを入力します。

**ユーザー名:** メールアカウント名(ユーザ名)を入力します。

**パスワード:** このアカウントのパスワードを入力します。

**メッセージのチェック:** 新着メッセージをチェックする頻度を指定します。新着メールが検知されると、イベントが発生します。

**ポート:** POP3 サーバのポート番号を指定します。通常、POP3 サーバはポート 110 を使用します。ご利用のサーバで別のポートに設定されている場合、そのポート番号に変更します。

**接続テストボタン**をクリックすると、指定したメールアカウントの接続をチェックすることができます。アカウントまたはメールサーバが存在しない場合やパスワードが正しくない場合は、レポートが表示され、通知されません。

**メッセージのスタート:** ここで指定した文字列で始まる件名のメッセージのみにより、イベントがトリガーされます。このように、既存のメールアカウントを使用して、ラベル発行をトリガーすることができます。通常はあまり受信しないような件名を選択し、このオプションを有効にします。

**メッセージの本文をファイルに保存する:** このオプションを選択すると、指定したファイルにメッセージの本文が保存されます。このファイルは、ラベル発行用のデータを含むテキストファイルとして、後で Label Gallery で使用することができます。また、このオプションでは、ラベル発行に使用される GalleryCommand をファイルに含めることができます。

以下も参照してください。

実行タブ

変数タブ

フィルタタブ

### COM ポートタブ

COM ポートトリガーイベントで使用されるオプションは、このタブにあります。シリアルポートでデータが受信されると、定義済みのアクションが実行されます。データを外部デバイスから受信できるだけでなく、デバイスに戻し、デバイスの動作を制御したりプログラムすることもできます。シリアルデバイス(バーコードスキャナ、RFID スキャナ、スケールなど)によっては、コンピュータとの双方向通信が必要になります。GalleryWatch では、以下の方法で外部シリアルデバイスを制御します。

#### 初期化コマンド

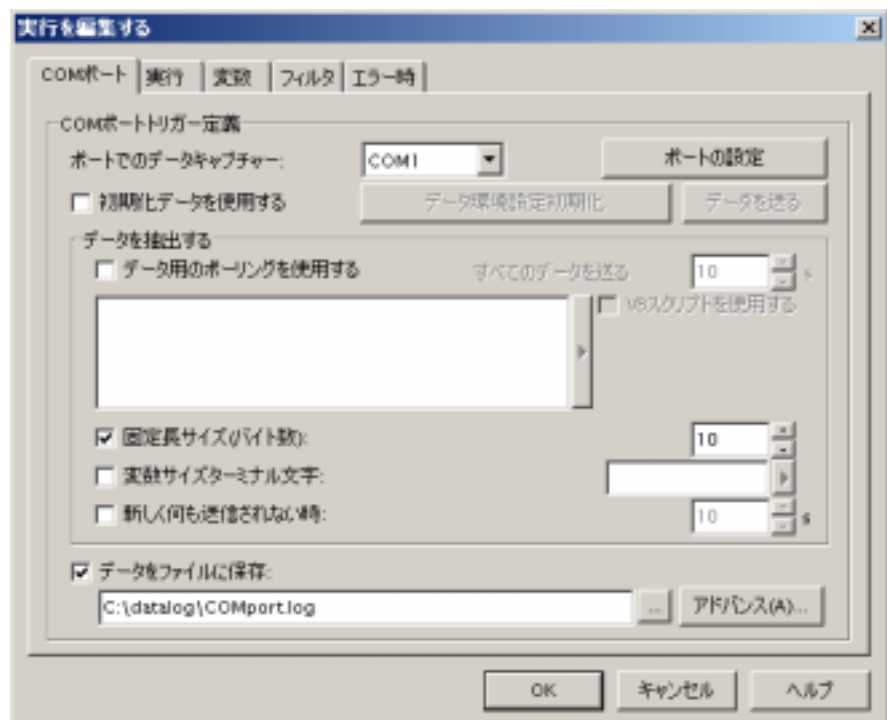
GalleryWatch でトリガーを有効にすると、初期化コマンドがシリアルデバイスに送信されます。これは 1 回限りのアクションです。

#### トリガー開始オプション (デバイスポーリング)

トリガー開始オプションは、データを自動送信しないデバイスをサポートしていますが、先にデータ送信要求が必要です。ポーリング期間を指定することができます。

**VB スクリプト実行**  
(ほかの全種類のアクションと合わせて)

VB スクリプトにより、すべての標準の VB スクリプト機能を使用し、変数の値を取得および設定し、シリアルポート間で読み書きを行うことができます。



実行を編集する: COM ポート タブ

**ポートでのデータキャプチャー:** ここには使用するシリアルポートを指定します。また、ボーレート、パリティ、ソフトウェアフロー制御、データビット、ストップビット、ハードウェアフロー制御などの**ポートの設定**を正しく指定する必要があります。**ポートの設定** ボタンをクリックし、通信の設定を定義します。

**初期化データを使用する** セクションの使用により、シリアルを有効にし、PC コンピュータとデータを交換できるようになります。シリアルデバイスによっては、データを送信する前に初期化が必要となります。

**データ環境設定初期化** ボタンを使用して、シリアルデバイスをアクティブにするために送信すべきデータを指定することができます。デバイスによっては、特定の文字列を受信しなければ起動しません。デバイスとの双方向通信により、デバイスがデータ送信可能の状態であるかを問い合わせることができます。**データを送る** ボタンをクリックして、初期化の設定をテストします。

**データ用のポーリングを使用する** オプションにより、シリアルデバイスと継続的に通信することができます。指定した時間間隔で、指定したデータ文字列がデバイスに送信されます。続いて、デバイスが応答し、要求された回答を送信します。デバイスに送る文字は、下のメモボックスに入力します。右側にある矢印が付いたボタンを使用して、特殊文字を入力します。特殊文字の入力方法については、Label Galleryのマニュアルを参照してください。

**VB スクリプトを使用する:** デバイスのポーリングを使用している場合、指定した時間間隔でデータが返されます。VB スクリプト機能により、受信データを操作することができます。2 つの関数を事前設定し、スクリプト内に含める必要があります。DataAvailable と ReceiveData はいずれもブール値を返します。

**DataAvailable** この関数は、シリアルデバイスからデータを取得し、受信データを認証して一貫性を保持します。

内部関数 Comport.Send と Comport.Receive を使用して、デバイスと通信することができます。詳細については、初期化データの設定を参照してください。

この関数が 1 を返すように設定すると、ReceiveData 関数が実行されます。0 を返すように設定すると、受信データは存在せず、アクションは実行されません。

次のポーリングの間隔にフォーカスが戻ります。

**ReceiveData** シリアルデバイスから送信され DataAvailable 関数で取得した受信データを、この関数に渡すことができます。次に、ReceiveData 関数を使用して、データの受信ストリームを必要に応じて操作することができます。データフィールドの並べ替え、テキストの追加または削除、その他のデータ操作を実行することができます。

この関数で 1 を返すように設定すると、トリガーのアクションが実行されます。0 を返すように設定すると、トリガーにアクションを実行させない信号になります。

次のポーリングの間隔にフォーカスが戻ります。

**ClearBuffer** このコマンドは、PC コンピュータのシリアルポートの入出力バッファをクリアします。

編集ボタンをクリックして、式ビルダーのスクリプトコードを編集します。

**固定長サイズ(バイト数):** このオプションを選択すると、指定した数の文字がシリアルポートに受信された場合にイベントが発生します。

**変数サイズターミナル文字:** 指定した文字列がシリアルポートで受信されると、イベントが発生します。数字の記号(#)の後に 2 つの 16 進数の ASCII 文字コードを加えて、特殊文字を使用することができます。カレット文字(^)を使用してエスケープ文字(ESC, 27)を指定することもできます。#または^を入力する場合、各々2 回ずつ入力します(##または^^)。

**新しく何も送信されない時:** この場合、最後の文字の受信後、指定時間が経過しても新たにデータが受信されないと、イベントが発生します。

例:シリアル(COM)ポートで文字を受信したと想定します。次に、シリアルポートの活動が停止します。10 秒後(または指定時間経過後)、イベントがトリガーされます。イベントを再びトリガーするには、まず何文字かの文字を受信しなければなりません。その 10 秒後にこのイベントが発生します。

**データをファイルに保存:** このオプションを選択すると、COM ポートで受信するすべてのデータがファイルに記録されます。イベントが発生すると、シリアルポートから送信されたデータの履歴が生成されます。アクションが処理された後、このファイルの内容は削除されます。このファイルには、イベント間に受信された文字が保存されます。**データファイルに上書きする** オプションを選択すると、同じファイル名の既存のファイルが削除され、新規のコピーに置き換わります。

以下も参照してください。

実行タブ

変数タブ

フィルタタブ

### ポートの設定

シリアルデバイスの接続プロパティを指定します。このダイアログボックスの値は、デバイス上の設定に一致しなければなりません。

通信パラメータを正しく設定するには、ご使用のシリアルデバイスのマニュアルを参照してください。デバイスと GalleryWatch の設定が一致しないと、通信は確立されません。

### データ環境設定初期化

シリアルデバイスを有効でデータ取得可能な状態にするためにシリアルデバイスに送信すべき文字セットを指定するには、このダイアログボックスを使用します。特定の文字セットで有効になるダミーのシリアルデバイスを使用している場合、その文字セットを入力することもできます。コード 32 以下の ASCII の特殊制御文字を入力する必要がある場合、Label Gallery ソフトウェアと同じ構文を使用します (Label Gallery オンラインマニュアルを参照してください)。特殊文字を簡単に使用するには、右側にある矢印ボタンをクリックします。使用可能なすべての特殊文字のリストが表示されます。

シリアルデバイスに対して初期化文字列が送信されるのは、GalleryWatch でトリガーチェックを起動したり、または GalleryWatch サービスを再起動した場合に限ります。

現在の作業状態をシリアルデバイスから照会元に対して報告できる場合は、VB スクリプトを使用してこの関数を有効にすることができます。スクリプトコードをプログラムして、シリアルデバイスとの通信を制御することができます。

通常のシナリオでは、何らかの初期化文字列をデバイスに送信し応答を待機します。応答結果が予測どおりであれば、初期化成功です。応答が正しくない場合、初期化は失敗であり、システムログにエラーが記録されます。ただし、トリガーはチェックされたままです。

シリアルポート間のデータ送受信に使用可能な関数は以下の 2 つです。

#### Comport.Send

ComPort.Send (Data:string,  
Length:integer):integer

ComPort クラス関数の Send には 2 つのパラメータがあります。最初のパラメータには、シリアルポートに送信されるデータが格納されます。2 つ目のパラメータには、送信データの長さが格納されます。この関数が返す整数値:

1 (シリアルポートへの書き込みが完了した場合)

0 (エラーが発生した場合)

#### Comport.Receive

ComPort.Receive  
(TimeOut:integer):string

ComPort クラス関数の Receive には

TimeOut パラメータがあります。このパラメータには、関数がデータの受信を待機する時間(秒)が格納されます。

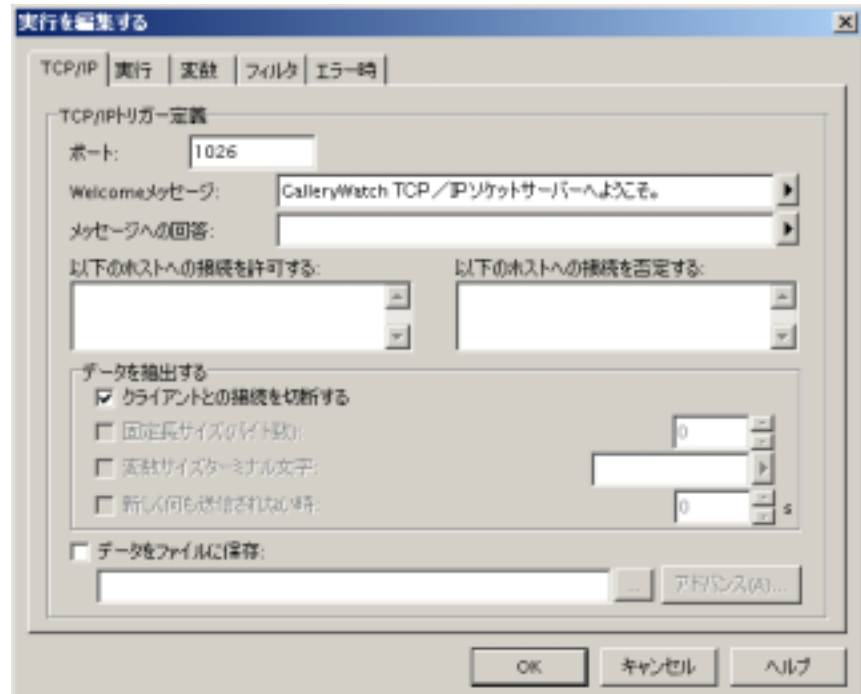
指定した時間内にデータが受信されると、関数はそのデータを返します。データが受信されない場合、空の文字列を返します。

組み込み関数 InitData はスクリプトコードに含まれていますが、修正することはできません。関数 Comport.Send と Comport.Receive を使用して、シリアルデバイスとデータを交換し、初期化が成功したかどうかを判断します。続いて、InitData 関数のアウトプットを設定し、GalleryWatch に初期化シーケンスの結果が通知されるようにします。

**編集** ボタンをクリックして、拡張された式ビルダのスクリプトコードを編集します。

### TCP/IP ソケット タブ

TCP/IP ソケットトリガーイベントにより使用されるオプションは、このダイアログにあります。指定した TCP/IP ソケットでデータが受信されると、定義済みのアクションが実行されます。



実行を編集する: TCP/IP ソケット

必要な TCP/IP パラメータを設定し、ソケットのモニタを有効にします。唯一の必須設定は、GalleryWatch が待機する **ポート** です。TCP/IP

サーバに接続したクライアントに対して、*Welcome メッセージ* が表示されます。コマンドを受信すると、クライアントに *Answer メッセージ* が送信されます。

TCP/IP サーバは、特定の TCP/IP ホストからの接続のみを **許可** し、その他の TCP/IP ホストからの接続を **否定** するように設定することができます。

**データを抽出する** オプションには、イベントをトリガーする文字列を指定します。

**クライアントとの接続を切断する**：このオプションを選択すると、クライアントが TCP/IP サーバと切断された場合にイベントが発生します。

**固定長サイズ(バイト数)**：指定した長さのデータがソケットで受信されると、常にイベントがトリガーされます。

**変数サイズターミナル文字**：指定した文字が受信データに含まれる場合、常にイベントがトリガーされます。

**新しく何も送信されない時**：この場合、最後の文字の受信後、指定時間が経過しても新たにデータが受信されないと、イベントが発生します。

**データをファイルに保存**：このオプションを選択すると、TCP/IP ソケットで受信するすべてのデータがファイルに保存されます。イベントが発生すると、シリアルポートから送信されたデータの履歴が生成されます。アクションが処理された後、このファイルの内容は削除されます。このファイルには、イベント間に受信された文字が保存されます。

以下も参照してください。

実行タブ

変数タブ

フィルタタブ

**実行タブ**

ここでは、イベントが発生した場合に実行するアクションを指定します。トリガーが設定されている場合に実行するアクションを、このダイアログで選択できます。

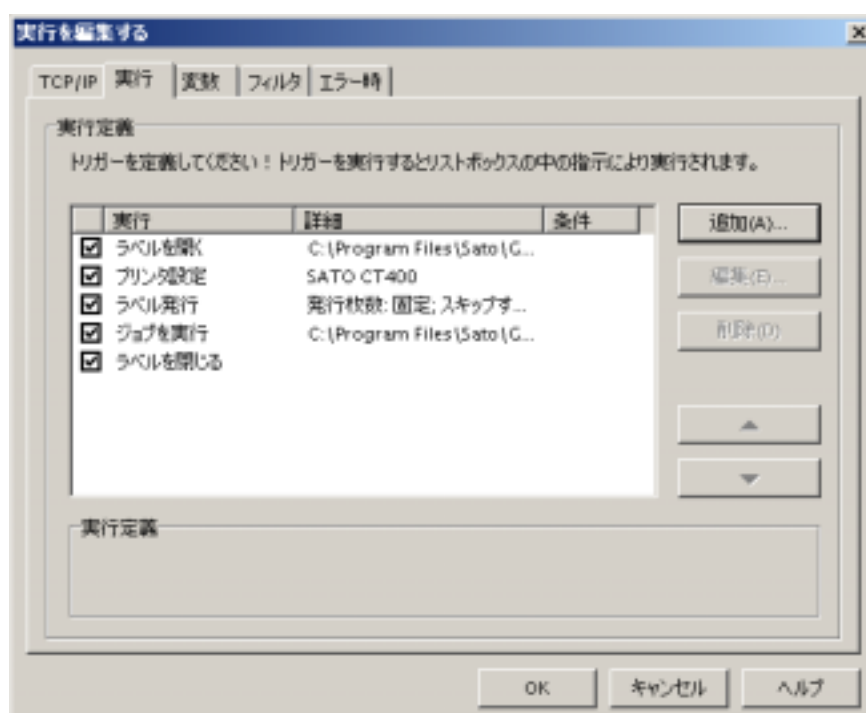
各アクションには次の 4 つのプロパティがあります。

<b>プロパティ有効</b>	各アクションを有効または無効にします。有効アクションのみが処理され、無効アクションは無視されます。
----------------	---

<b>実行の種類</b>	実行の種類では、実行するアクションの種類を指定します。
<b>詳細</b>	ここでは、アクションに関する詳細情報が表示されます。ここを参照して、特定のアクションに関する情報を確認することができます。
<b>条件プロパティ</b>	条件は、ブール値(真/偽)を返す VB スクリプトの式です。条件は、アクションが実行される直前の実行時間にチェックされます。条件が真を返す場合、そのアクションが実行されます。結果が偽の場合、アクションはスキップされません。

**追加** ボタンをクリックすると左側のアクションリストに新規アクションを追加でき、**編集** ボタンをクリックすると選択したアクションのプロパティを変更でき、**削除** ボタンをクリックすると選択したアクションをリストから削除することができます。矢印ボタンを使用すると、リストから選択したアクションの位置を変更することができます。アクションは、リスト内の順序に従って上から下の方向に処理されます。エラーが発生してアクション処理が中止された場合、そこからリストの最後までアクションは実行されません。エラーの原因はログファイルに記録されます。

下部にある**実行定義** セクションには、現在選択されているアクションに関する詳細情報が表示されます。情報を確認するためにアクションを編集する必要はありません。



実行を編集する: 実行 タブ

以下も参照してください。

## 実行プロパティ

### 実行プロパティ

このダイアログでは、トリガーが開始されると実行されるアクションを選択します。左側のリストでアクションを選択し、右側でそのアクションのオプションを指定します。

各アクションには各々異なるオプションがあります。

**条件** は VB スクリプトのブール式です。真または偽の 2 つの結果しかありません。このオプションを使用すると、いずれかの項が一致した場合にのみ、現在のアクションが有効になります。式の結果、条件が真を返すと、アクションが開始されます。

### プリンタ設定 アクション

ラベルを発行する別のプリンタを選択します。この設定により、ラベルに直接設定されたプリンタの設定が上書きされます。固定プリンタ名を使用するか(システムにインストールされているプリンタのリストからプリンタ名を選択)、プリンタ名を含む変数を選択します。このアクションは、ラベルファイルを変更することなく複数のプリンタで 1 つのラベルファイルを発行する場合に使用できます。

### カスタムコマンド を送る アクション

**カスタムコマンド** メモフィールドに GalleryCommand を追加入力することができます。ボタンをクリックすると、これらのコマンドが Label Gallery に送信されます。カスタムコマンドを送信する前に、選択したラベルは Label Gallery に取り込まれています。

コマンドに変数を含めることもできます。変数名の前にコロンを付けて入力します (たとえば、:[variable])。ボタンが押されるとアクションが開始され、変数の値が使用されます。

表示されるメモフィールドにカスタムコマンドを入力します。簡単なスクリプトで十分です。複雑なスクリプトを定義する必要がある場合には、**編集** ボタンをクリックして式ビルダを起動します。

GalleryCommand の詳しい使用方法については、**Label Gallery** オンラインヘルプまたはマニュアルを参照してください。

### ラベル発行 アクション

このアクションにより、フォームに添付されたラベルが発行されます。発行するラベル数を指定する方法はいくつかあります。このコマンドにはベーシクタブとアドバスタブがあり、同じアクションに対して設定することができます。

ベーシクタブには、使用頻度の高い発行パラメータが含まれています。

**固定** ラジオボタンを選択すると、編集フィールドに入力された枚数だけラベルが発行されます。

**無制限** を選択すると、現在のプリンタで印刷可能な最大枚数のラベルが発行されます。ラベル作成が終了しなくなるため、無限ループを作成しないようご注意ください。通常、このオプションはデータベースファイルで使用されます。データベースファイルでは、無制限とは「データベース全体を発行すること」を意味します。

**発行枚数変数** を選択すると、ラベル上の変数フィールド (プロンプトされる変数またはデータベース接続変数) により、ラベルの発行枚数が設定されます。多くの場合、これはデータベース内のフィールドで、これによりラベル発行を半自動化できます。

**変数から** ラジオボタンを選択すると、選択した変数

によりラベルの発行枚数が設定されます。

必要があれば、ページ上でスキップするラベルの枚数を入力することもできます。この数値も、**固定** または **変数から** で取得した値にすることができます。これが有用なのは、ラベルの発行シート(多くの場合はレーザープリンタおよびインクジェットプリンタ)やシートの最初の何枚かのラベルがすでに使用されている場合です。

アドバンスタブには、**ラベルのコピー** および **発行枚数** のコントロールがあります。これらのコントロールは固定にするか、変数から値を取得することができます。最初のコントロールは、発行するすべてのラベルで使用する発行枚数を設定します。2 つ目のコントロールは、発行処理を繰り返す回数を定めます。ラベルの発行枚数は、1 回の発行アクション用の式です。

例えば、ベーシクタブで発行枚数を 5 に設定し、アドバンスタブで発行枚数を 3 に設定すると、5 枚のラベル発行が 3 回繰り返されます。

### ジョブを実行 アクション

指定したジョブファイルを Label Gallery で実行します。固定ジョブ名を設定するか、または、変数によりジョブ名を指定することができます。ジョブファイルは、Label Gallery を制御する GalleryCommand を含むテキストファイルです。このオプションは、上記の**カスタムコマンドを送る**に非常に似ています。唯一の違いは、GalleryCommand の含まれる定義済みテキストファイルを使用することです。サンプルのジョブファイルは、Samples\Labels フォルダ下に Label Gallery と共に提供されています。

### 変数を設定 アクション

選択した変数の値を設定します。

### ドキュメント/プログラムを開く アクション

ボタンをクリックすると、指定したプログラムが実行されます。実行可能プログラム(拡張子.EXE)のパスと名前が指定されている必要があります。選択したプログラムのフルパスと名前を含む変数を選択することもできます。必要なアプリケーションに関連するドキュメント名を入力しただけではアクションは実行されません。実行可能ファイル名を使用する必要があります。例えば、Word ドキュメント

SAMPLE.DOC を開くには、プログラム名を入力するだけでは十分ではありません。アプリケーションの名前を完全に指定し、ドキュメント名をパラメータとして入力する必要があります。テキスト全体を括弧 " " で囲みます。完成したコマンドは以下のようになります。"C:\Program Files\Microsoft Office\Office\Winword.exe C:\My Documents\SAMPLE.DOC".

#### ラベルを開く アクション

SATO Label Gallery Plus ソフトウェアで作成したラベルファイルを開きます。

#### ラベルを閉じる アクション

ラベルを開くコマンドで開いたラベルを閉じます。GalleryWatch では、複数のラベルを同時に開くことができます。ラベルは開いたままにしておくことをお奨めします。それにより、1 回の印刷セッションだけで、印刷を高速化し印刷結果を最適化することができます。GalleryWatch を終了すると、開いていたラベルがすべて自動的に開きます。

#### VB スクリプト アクション

スクリプトでは、すべての標準 VB スクリプト機能を使用することができます。また、スクリプトは変数の値を取得および設定し、シリアルポート間で読み書きを実行できます。式ビルダを使用してスクリプトを書くことができます。

スクリプトの構文をチェックするには、**スクリプトチェック** ボタンをクリックします。スクリプトに構文エラーがあった場合は通知されます。

### 変数 タブ

このタブを使用して、アクションで使用される変数を指定します。4 種類の変数があります。



#### ラベルファイルで指定されるプロンプト変数

GalleryWatch は、ラベルファイルからこれらの変数を読み取り、リストに表示します。



#### ラベルファイルで指定されるデータベース変数

GalleryWatch は、ラベルファイルからこれらの変数を読み取り、リストに表示します。



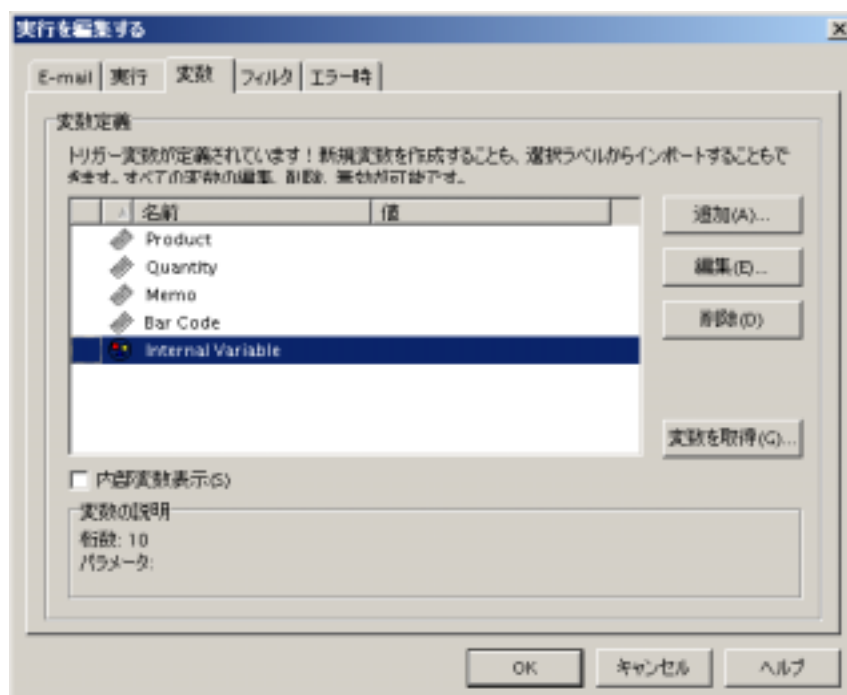
#### GalleryWatch で指定される変数

これらの変数は GalleryWatch にあり、ラベルファイルには含まれません。これらの変数はフィルタ機能で使用することができます。



## GalleryForm の内部変数

これらの変数は GalleryForm のみで使用可能で、ラベルファイルには含まれません。これらの変数はフォームやアクションで使用することができます。



実行を編集する: 変数タブ

新しい変数を定義するには、**追加** ボタンをクリックします。この変数は、現在の GalleryWatch アクションのみで使用できます。また、この変数を使用して、フィルタタブに定義したフィルタから値を取得することができます。**編集** をクリックすると選択した変数のプロパティを変更でき、**削除** をクリックするとリストから変数を削除することができます。

GalleryWatch は、Label Gallery で指定したあらゆるラベルファイルに接続し、ラベルレイアウトから変数を取得することができます。**変数を取得** ボタンをクリックし、該当するラベルファイルを選択します。

**内部変数表示** オプションを選択すると、変数のリストに内部変数が追加されます。内部変数は、システムまたは GalleryWatch から値を自動取得します。フォームでは、チェックを入れた内部変数のみが使用されます。ほかの変数はエレメントでは使用されません。この機能により、すべての変数ではなく選択した変数の機能のみを使用するよう制限できます。

リスト内の変数をソートするには、変数のソート基準とするフィールド見出しをクリックします。同じ見出しを何度かクリックすると、昇順/降順が切り替わります。内部変数が表示されている場合、内部変数フィールド

ドの見出しをクリックすると、すべての内部変数の選択/選択解除が切り替わります。Ctrl を押しながらか見出しをクリックすると、選択が反転します。

## その他

### 内部変数


#### 変数ダイアログボックス

このダイアログボックスでは、変数の設定を確認し、編集することができます。GalleryWatch で指定した変数のプロパティのみを変更することができます。ラベルファイルに定義された変数を取得した場合、これを変更することはできません。それらの変数のプロパティを変更する必要がある場合、Label Gallery を使用して変更します。変数をラベルファイルからもう一度取得すると( **変数を取得** ボタン)、GalleryWatch は変数の設定を自動更新します。

<b>名前</b>	変数名
<b>桁数</b>	変数の長さ(変数の値で使用可能な最大文字数)
<b>数字</b>	変数の形式は数値です。入力できるのは数値のみです。このオプションを無効にすると、あらゆる文字を入力できるようになります。
<b>桁数固定</b>	変数の桁数が固定されます。指定された桁数とまったく同じ桁数の文字を入力しなければなりません。
<b>デフォルト値</b>	変数のデフォルト値。
<b>必須</b>	この変数の値は、印刷開始の順序で指定する必要があります。この変数を空にすることはできません。

#### 内部変数

内部変数は自動的に入力されるため、変更はできません。内部変数は編集または変更ができず、フォームのみで使用できます。内部変数の値は、発行されるすべてのラベルにおいて更新されます。

内部変数は  アイコンで表示されるため、その他の変数と容易に区別することができます。

使用可能な内部変数のリストは以下のとおりです。

**ComputerName** Windows システムの設定に基づき、ラ

<i>DataFileName</i>	<p>ベルを処理する PC コンピュータの名前に関する情報を格納します。</p> <p>ファイルのパス (c:\130\trigger\file.dat) を含むデータが保存された一時ファイルの名前を格納します。</p> <p>これは、各種トリガー (ファイル、E-mail、シリアルポート、TCP/IP) から受信された入力データを含む一時ファイルです。プログラムで実際に処理されません。</p>
<i>Date</i>	現在のシステム日付が格納されます。
<i>DefaultPrinterName</i>	システムのデフォルトプリンタ名が格納されます。
<i>PathDataFileName</i>	データの含まれる一時ファイルのパスが格納されます (c:\trigger\)
<i>ShortDataFileName</i>	DataFileName と同じですが、パスのないファイル名のみが格納されます。
<i>ShortTriggerFileName</i>	アクションを開始させたトリガーファイル名が含まれます。ファイルトリガーの値のみが含まれます。
<i>SystemUserName</i>	アプリケーションを実行しているログイン中の Windows システムユーザ名が格納されます。
<i>Time</i>	現在のシステム時刻が格納されます。
<i>TriggerFileName</i>	ShortTriggerFileName と同じですが、ファイルのフルパスを含みます。
<i>UserName</i>	Label Gallery ソフトウェアで指定されたユーザ名が格納されます。ユーザ管理を有効にした場合にのみ、値を持ちません。

### フィルタタブ

フィルタ機能が効果を発揮するのは、トリガー (ファイル、シリアル、E-mail、TCP/IP) から受信したデータをラベルで直接使用するのは適切ではない場合です。フィルタを使用して、実際に必要であるデータの一部のみを抽出することができます。通常、受信データは以下の場合にフォーマットされます。

## 非構造化ファイル

## ドキュメント分析フィルタ

このフィルタは、構造を持たないデータで使用できます。このフィルタの最適な例は、レポートファイルまたはプリンタデータストリームファイル(プリンタコマンドを含むテキストファイル)です。このフィルタを使用すると、特定の変数に割り当てる、受信データ内のデータ部を定義することができます。

## 構造化ファイル

## テキストデータベース分析

このフィルタは、ラベル上の変数フィールドのデータを含む標準のテキストデータベースファイルで使用できます。固定幅のフィールドまたは特定の文字で区切られたフィールドでデータをエンコードすることができます。フィールドの区切りには、様々な区切り文字を使用できます(カンマ、セミコロン、タブ、ユーザ定義文字)。

## 構造化ファイル

## XML データ分析

このフィルタは XML ファイルにフォーマットされたデータで使用できます。

トリガーによりフィルタにデータが提供されます。トリガーのアウトプットはフィルタのインプットとして使用されます。フィルタをテキストファイルに常に接続させる必要はありません。フィルタは、シリアル、E-mail、TCP/IP トリガーのアウトプットでも機能します。

フィルタ機能が有効になっていると、トリガーされるアクションにおいて入力データの情報の一部を使用して正しいフィールドを抽出し、ラベルの変数フィールドで値を使用することができます。

**フィルタ有効** をクリックして、フィルタの定義を開始し、**フィルタの種類** を選択します。このダイアログボックスの外観は、選択したフィルタの種類によって異なります。

- ドキュメントの分析:リポート可能アイテムを含むエリアが入力データに含まれる場合、**REP を追加** ボタンをクリックし、リポート可能エリアの開始点/終了点を設定します。
- テキストのデータベース分析:元のデータ種類の構造は、**固定** または **可変長** にすることができます。固定にすると、フィールド幅は常に同じになり、可変長にすると、フィールドは **区切り文字** セクションに定義された文字で区切られます。事前定義された区切り文字はタブですが、カスタム編集フィールドにこれ以外の文字を入力して区切り文字として使

用することもできます。必要に応じて、**デリミタ(区切り)**を指定することができます。データが最初の行から始まっていない場合、**インポート開始行**を正しく設定します。

- XML データベース分析 **追加**、**編集**、**削除**、および各ナビゲーションボタンを使用してデータベースを定義するか、外部 XML ファイルから構造を取り込むこと(推奨)ができます。

**フィールドのプロパティ** ダイアログボックスは、全種類のフィルタに共通で、ラベル上の変数にデータフィールドをマッピングするために使用されます。変数が定義されていない場合、まず変数タブで変数を作成します。**追加** ボタンをクリックし、新規のマッピングを変数に追加します。**編集** ボタンをクリックし、既存の変数の設定を変更します。**削除** をクリックして、選択した変数を削除します。**フィールド取得** ボタンは、テキストデータベース分析フィルタのみで使用できます。このボタンは、既存のテキストデータベースのテキストファイルの定義を取得する場合に使用します。入力データが既存のテキストデータベースと同様にフォーマットされている場合、フィールド定義の近道としてこれを活用できます。テキストデータベースウィザードに従って、構造を抽出します。

ダイアログボックスの下部に、選択した変数のフィルタ情報が表示されます。ここで、その変数の抽出の定義を確認できます。

構造を定義し、変数をマッピングしてから、フィルタの機能をテストします。**定義確認** ボタンをクリックし、いずれかのドキュメントデータファイルを開き、フィルタを確認します。このボタンは、フィルタの実行をシミュレートします。機能はアクションをトリガーした場合と同じですが、実際にはラベルは印刷されず、(ラベルで使用される)データの値を含むダイアログボックスが表示されます。

### ドキュメントの分析

この種類のフィルタは、非構造化データソースからフィールドを取得する場合に使用します。多くの場合、以下の 2 種類のデータが使用されます。

**レポートファイル** レポートファイルは、リピート可能データを持つ半定義されたデータ形式の例です。レポートのヘッダとフッタは通常同じで、会社関連情報(住所、電話番号、E-mail など)が含まれます。

レポートファイルにフィルタを設定するには、「ドキュメントにリピート可能データを含む」オプションを有効にする必要があります。設定ボタンをクリックして、リピート可能データエリアを定義します。このオプションの目的は、目的のフィールドをフィルタが探す範囲を制限す

ることです。

通常、リピート可能データエリアの 1 行が 1 ラベル分のデータを表します。この場合、**リピート可能部分の列数** オプションは 1 に設定されます。

リピート可能データエリアを定義してからダイアログボックスを閉じ、変数に対する入力データのフィールドのマッピングに戻ります。

### プリンタコマンド ファイル

このデータソース構造は完全な非構造化ファイル形式ですが、フィールドの位置を把握できるか、一般的な前補填テキストと後補填テキストに挟まれています。コマンドの構文は、変更可能なパラメータとまったく同じ構文なので、データストリーム内で容易に識別することができます。

通常、ソースデータの複数の行により 1 つのラベルのデータが表示されます。**リピート可能部分の列数** オプションは、データを取得する行数に設定されます。

続けて、データ中のフィールドに変数を直接マッピングします。

受信ドキュメントのデータを分析する規則を定義するには、**追加**、**削除**、**REP を追加** の各ボタンを使用します。

必要であれば、矢印ボタンにより、定義済みのデータ構造を変更します。表示順序は、後でラベルの処理において使用されることはなく、このダイアログボックス内でデータを表示するためだけに使用されます。

以下も参照してください。

リピート可能データエリア

### リピート可能データエリア

リピート可能データエリア定義

レポート可能データを含むエリアの開始点と終了点を指定し、レポート可能部分の列数を指定します。

通常、ラベルのアイテムを含む列の数を指定します。そのようなレポートのデータが常に特定の列/カラムで開始/終了する場合、**列番号** および **カラム番号** で位置を指定することができます。これは最も簡単な例です。ただし、列番号のみが分かっている列内でのカラムの位置が分からない場合、**前補填ワード** を使用すると、GalleryWatch に正しい値を提供することができます。同じ列に前補填が実際の値として定義されていない場合、必要な列数だけデータを上下にオフセットする (**+/-列**) ことができます。

データソースに正式なフッタの終点がなく、レポート可能エリアが最後まで続く場合、**ファイルの終り** オプションをチェックします。

エリアの開始点と終了点は 3 つのパラメータを使用して定義します。列番号、カラム番号、前補填ワードです。開始点/終了点を指定するには、2 つのパラメータがあれば十分です。例えば、データが列番号 10 から始まり、必要なデータの前に常に「Data #」という文字列が付く場合、**列番号** に 10、**前補填** に Data # と設定し、**カラム番号** は 0 のままにします。

ドキュメントに 2 つ以上のレポート可能部分がある場合、**レポート可能部分の列数** で指定します。このオプションにより、レポート可能部分を構成するデータの行が定義されます。

### ドキュメント変数のマッピング

このダイアログボックスで、データを抽出するフィールドの位置を選択し、変数に値を割り当てます。

このダイアログボックスは、ドキュメントフィールドとレポート可能フィールドの両方で使用されます。これらのフィールドの違いは、ドキュメントフィールドはドキュメントに絶対的に表示されるのに対して、レポート可能フィールドはレポート可能エリアに相対的に表示される点です。

ドキュメントフィールドのみを使用している場合、トリガーからの入力データは 1 つのラベルのみで使用されます。レポート可能変数を使用している場合、レポート可能エリアの各アイテムは 1 つのラベルで同時に使用されます。レポート可能エリアに 10 個のアイテムがある場合、10 枚のラベルが発行されるか、または、10 個のアイテムを同時に使用して 1 枚のラベルが発行されます。いずれになるかは、「レポート可能データエリア定義」ダイアログボックスの **レポート可能部分の列数** の設定により決まります。

ドキュメント変数とレポート可能変数は組み合わせて使用することができます。ドキュメント変数がレポート可能変数の使用箇所すべてで同じ

であり、発行されるすべてのラベルで同じであるのに対し、レポート可能変数は各アイテムに対して変化します。

フィールドの種類を選択するときに、値を設定する変数にフィールドを接続します。この値は SATO Label Gallery Plus のラベル変数に転送され、ラベルの発行で使用されます。

入力データにおいて、データフィールドのあるセクションの開始点と終了点を指定する必要があります。セクションの開始点と終了点は 3 つのパラメータを使用して定義します。列番号、カラム番号、前補填ワードです。開始点/終了点を指定するには、2 つのパラメータがあれば十分です。3 つ目のパラメータは変更しません。例えば、データが列番号 10、カラム番号 14 から始まる場合、**変数スタート** セクションで、**列番号** に 10、**カラム番号** に 14 と設定し、**前補填** は空のままにします。データの幅が 7 文字であることが分かっている場合、**変数ストップ** セクションで、**列番号** に 10、**カラム番号** に 21 と設定します。

その他のすべてのフィールドに対して同様に設定します。

このダイアログボックスで設定可能な変数がない場合、まずいくつかの変数を定義するか、または、ラベルファイルから変数をインポートします。この手順は変数タブで行います。

**最初の文字の前と最後の文字の後のスペース削除:** 先頭と末尾のスペースを抽出データから削除したい場合に、このオプションを選択します。

### テキストのデータベース分析

トリガー入力データが構造化データ形式である場合にこのオプションを使用します。データの種類は以下のいずれかを指定できます。

<b>固定</b>	フィールドの幅は常に同じです
<b>可変長</b>	フィールドは特定の文字で区切られます

まず、データ形式を定義する必要があります。**追加** ボタンをクリックし、テキストファイルの構造を定義します。データベースプロパティのダイアログボックスが表示されます。

テキストデータ構造を定義する際は、テキストデータベースのフィールドに変数をマッピングする必要があります。

いずれかのトリガーからの入力データが一般的なテキストデータベース構造である場合、入力トリガーデータと同じフィールド構造を持つテキストファイルがシステム内であれば、**フィールド取得** ボタンを使用して、システム内のファイルから構造を取得することができます。これにより、フィールド定義を簡単に行うことができます。テキストデータベーススイザ

ドに従って、構造を抽出します。同じ構造のテキストデータベースのフィールドがリストボックスに表示されます。

最後に、それらのフィールドを GalleryWatch の対応する変数に接続します。定義済みの変数が GalleryWatch に存在しない場合、まず変数を定義するか、または、ラベルファイルから変数をインポートします。この手順は変数タブで行います。

### データベースプロパティ

ここでは、フィルタ処理に必要なテキストデータの構造を設定します。このテキストデータのソースはいずれかのトリガーです。テキストデータは内部でフィルタに渡されます。

**インポート開始列:** データが実際に開始されるテキストソースの列を指定します。通常、上部の数行は、ヘッダとデータの定義の説明文に使用します。

**デリミテッドデータ種類:** テキストデータソースのデータフィールドが特定の文字で区切られる場合に、このオプションを選択します。区切り文字のセクションで区切り文字を選択できます。事前定義された区切り文字(タブ、セミコロン、カンマ)を使用するか、独自の区切り文字を定義することができます。データフィールドに区切り文字が値として含まれる場合、そのデータの値はデリミタ文字で囲む必要があります。通常、二重引用符または一重引用符を使用します。

**固定データ種類:** テキストデータソースのデータフィールドが列内で常に固定幅になる場合に、このオプションを選択します。

### テキストデータベース変数のマッピング

入力トリガーファイルの構造がシステム内のどのテキストデータベースファイルとも同じでない場合、**フィールド取得** ボタンを使用してファイル構造を取得することはできません。この場合、フィールド構造を手動で設定する必要があります。

コンボボックスから適切な **変数** を選択します。既存のテキストファイルからデータベース構造をインポートする場合、**フィールド名** オプションを選択します。データ構造を手動で定義する場合、フィールドの説明にフィールド名を使用できます。

このダイアログボックスで設定可能な変数がない場合、まず変数をいくつか定義するか、ラベルファイルから変数をインポートします。この手順は変数タブで行います。

このダイアログボックスの外観は、選択したデータ種類によって異なります。

テキストデータベースへの接続の定義時に固定データ種類に設定した場合は、**固定データ種類** セクションのみ使用できます。フィールドの開始位置と長さを設定できます。位置は、行の先頭からの文字数で計算されます。

テキストデータベースへの接続の定義時に区切りデータ形式を設定した場合は、**区切りデータ形式** のみを使用できます。変数で使用するフィールド番号を選択します。

**最初の文字の前と最後の文字の後のスペース削除:** 先頭と末尾のスペースを抽出データから削除する場合に、このオプションを選択します。

### XML データベース分析

データが外部の構造化 XML ファイルに格納されている場合に、このオプションを選択します。

XML 定義は、**追加**、**編集**、**削除**、および各ナビゲーションボタンを使用して、手動で作成します。ただし、最も簡単な方法は、XML ファイルから定義を読み込み、インポートする方法です。**構造を取得** ボタンをクリックし、該当の XML ファイルを開きます。プレビューウィンドウにデータの定義が表示されます。定義が適当であれば、**インポート** ボタンをクリックしてインポートの処理を完了します。

必要があれば、矢印ボタンを使用してデータ構造を調整します。データ種類は同じレベルの構造内に限り上下に移動させることができます。

外部ファイルから XML 構造をインポートして、必ずしもすべてのフィールドがラベルで必要ではない場合には、構造のビューを簡素化することができます。**削除** ボタンを使用して、不要なフィールドを削除します。XML 構造全体を表示する必要はありません。構造のプレビューを簡素化しても、データはまだ外部ファイルに含まれています。

構造を定義した後で、XML データ種類を変数にマッピングする必要があります。ラベルに含めるフィールドをすべて選択し、編集ボタンをクリックして、正しい変数との接続を確立します。変数が定義されていない場合は、変数タブで変数を定義してください。

繰り返すデータを与える必要があるデータ種類は、繰り返すエレメントとして定義します。これらのデータ種類に限り、リピート可能ブロック、つまりエレメントの繰り返しを許可するプロパティとして定義できます。

構造を定義し、変数をマッピングした後で、フィルタの機能をテストしてください。**定義確認** ボタンをクリックして XML データファイルを開き、フィルタを確認します。このボタンにより、フィルタの実行がシミュレートされます。

機能はアクションをトリガーした場合と同じですが、ラベルは実際には印刷されず、(ラベルで使用される)データの値を含むダイアログボックスが表示されます。

定義した構造を後で使用する場合や、別のトリガーで使用する場合には、**保存** ボタンをクリックします。定義した構造が別の XML ファイルに保存されます。この XML ファイルには、GalleryWatch で設定したフィルタ構造のみが含まれます。データはファイルに保存されません。

保存したフィルタ構造を取得するには、**ロード** ボタンをクリックします。

## その他

### XML フィールドのプロパティ

#### XML フィールドのプロパティ

XML の定義に新規のフィールドを設定するには、次のプロパティを定義します。

**ファイル名** フィールド名に、内容を容易に識別でき、ほかのフィールドと区別できる名前を指定します。

**フィールド種類** 以下のリストのいずれかのアイテムを使用できます。

**エレメント** このデータ種類は、XML 定義の基本構造です。各エレメントは、データを格納して属性として機能させたり、サブフィールドから成る追加構造(エレメント、繰り返すエレメント、または属性から構築)を格納することができます。

**繰り返すエレメント** このデータ種類は、標準エレメントと同じ構文を持ち、同じ方法で使用することができます。ただし、繰り返すデータに対して使用する必要があります。繰り返すエレメントとして定義されたデータ構造に限り、レポート可能ブロックとして指定して使用することができます。

このデータ種類は、1 レベル上のエレメントで繰り返されるフィールドを定義します。

**属性** このデータ種類は、フィールドの値を格納します。一番小さいデータ種類であり、これ以上分割することはできません。

**変数** これは、ラベルまたは GalleryWatch アプリケーションに定義された変数です。XML ファイルから選択したフィールドに値を保存します。

**リポート可能ブロックとして項目を使用** 現在のフィールドをリポート可能ブロックとして定義する場合にこのオプションをチェックします。リポート可能ブロックは、ブロックを構成するエレメントに 2 つ以上のレコードを与えることができるデータ構造です。そのようなフィールドは、他のサブフィールドを含むノードである必要があります。社員の住所データが含まれる XML ファイルを想定してください。各々のレコードには、住所を 2 つ以上(自宅、職場など)指定することができます。「住所」エレメントには、番地、地名、郵便番号、国名などのサブフィールドがあります。社員名を、すべての関連住所と共に使用したい場合、「住所」エレメントをリポート可能ブロックとして指定します。「住所」エレメントがリポート可能ブロックとして定義されていない場合、最初のデータの値のみが使用されます。

### エラー タブ

GalleryWatch 印刷サーバでラベルを発行している間に何らかのエラーが発生した場合、このエラーイベントを遮断して、アクションを実行したデータを保存して後で使用することができます。データは、アプリケーションで受信した形式で保存されます。データ元は重要ではありません。使用可能なトリガーであればどのトリガーでも使用できます。

エラーは様々な理由で発生します。例えば、プリンタの用紙切れ、プリンタとの通信障害、変数またはバーコードに間違っただ変数が割り当てられているなどが考えられます。

保存したデータを使用して後でラベルを再発行したり、デバッグのために使用して、不適切なデータがラベル変数に使用されていないかどうかを確認することができます。

**エラーイベントを有効** オプションをチェックして、エラーイベントのモニタを有効にします。固定ファイル名を使用できます。これは、エラーが発生するたびに上書きされます。または、**アドバンス** ボタンをクリックして、エラーに応じて異なる変数ファイル名を指定できます。

### 2.3.7 トリガーを削除

現在選択しているトリガーを削除します。このトリガーとそれに接続されたアクションに関連するすべてのデータが破棄されます。

## 2.4 表示メニュー

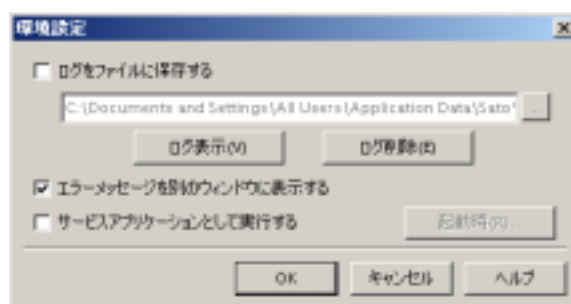
### 2.4.1 ツールボックス

ツールボックスを表示または非表示にする場合に指定します。GalleryWatch アプリケーションで頻繁に使用するコマンドのショートカットが含まれます。

## 2.5 オプションメニュー

### 2.5.1 環境設定

GalleryWatch アクティビティは、ファイルに保存したり、メインウィンドウに表示することができます。



オプション ダイアログボックス

**ログをファイルに保存する** オプションを選択すると、指定したファイルにアクティビティレポートが追加されます。このファイルは時間が経過すると非常にサイズが大きくなるため、ときどき確認して削除することをお奨めします。

**ログ表示** オプションにより、ログファイルを確認できます。ログファイルを開くにはメモ帳を使用します。サイズが大きい場合はワードパッドを使用します。

**ログ削除** オプションにより、ログファイルが削除されます。

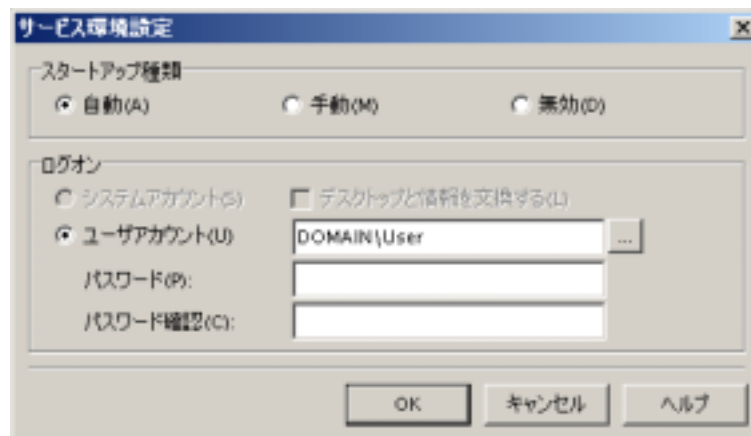
**エラーメッセージを別のウィンドウに表示する** オプションをチェックすると、トリガーイベントに関するエラーメッセージは新規ウィンドウで表示されるようになります。通知を確認してから、GalleryWatch の操作を続けてください。通常、これらのメッセージはログ領域に表示されるため、GalleryWatch のウィンドウを最小化すると表示されません。

**サービスアプリケーションとして実行する** オプションを選択すると、GalleryWatch がサービスアプリケーションとしてバックグラウンド実行されます。すなわち、ユーザがログオンしていなくても、コンピュータ上で

GalleryWatch が起動します。このため、無人でラベルを発行することができます。GalleryWatch は Windows OS により自動的に起動できます。このオプションは、Windows NT、2000、XP の各 OS のみで機能します。Windows 95、98、ME では、サービスアプリケーションのバックグラウンド実行はサポートされていません。**起動時** ボタンをクリックし、GalleryWatch をサービスアプリケーションとして実行する場合の詳細オプションを設定できます。サービス環境設定ダイアログボックスが開きます。

サービスアプリケーションとして実行中の GalleryWatch でジョブファイルを使用する場合、割り当てられたドライブではなく UNC を使用してください (例: LABEL "G:\MY LABELS\LABEL.LBL" ではなく "\\SERVER\MY LABELS\LABEL.LBL" )。

### サービス環境設定



#### サービス環境設定

このダイアログボックスを使用して、GalleryWatch の起動パラメータをサービスアプリケーションとして設定します。このダイアログボックスのレイアウトは、サービスアプリケーションの起動を設定するための Windows のダイアログボックスに似ています。

**スタートアップ種類** は、次の Windows の起動時に GalleryWatch を起動する方法を指定します。

**ログオン** セクションでは、GalleryWatch がシステムにログオンするために使用するユーザアカウントを設定します。ドメインユーザ (構文は DOMAIN\USERNAME) またはローカルユーザ (構文は .\USERNAME) を使用できます。先頭のピリオドとバックスラッシュ文字に注意してください。

3つの点が並んだ (...) ボタンをクリックして、ローカルユーザまたはドメインユーザを選びます。システムへのログオンで、このユーザのコンピュータアカウントが使用されます。

GalleryWatch は、システムサービスコンソールから管理できます。開始/終了は、サービスコンソールから行うことも、GalleryWatch から直接行うこともできます (開始と終了の各ボタンはサービスモードでは異なるアイコンで表示されます。)

---

## 2.6 ツールメニュー

このメニューでは、SATO Label Gallery TruePro の他のプログラムをすばやく起動することができます。

### Label Gallery

ラベルのデザインと発行を行うプログラム、**Label Gallery** を起動します。

### GalleryForm

ユーザ入力フォームをカスタムデザインするプログラム、**GalleryForm** を起動します。

### GalleryData

データベースマネージャおよびエディタ、**GalleryData** を起動します。

### GalleryMemMaster

プリンタメモリカードマネージャ、**GalleryMemMaster** を起動します。

---

## 2.7 ヘルプメニュー

### 2.7.1 内容

ダイアログボックスが開き、ヘルプの使用法の説明が表示されます。初めてヘルプを使用される場合は、この説明をお読みください。

### 2.7.2 Label Gallery on the web

現在使っているウェブブラウザで **Label Gallery** のウェブサイト ([www.satoworldwide.com](http://www.satoworldwide.com)) を開きます。

### 2.7.3 バージョン情報

プログラムのタイトルフォント、プログラムに関する情報、およびシリアル番号を表示するダイアログボックスを開きます。

## 2.7.4 使用できないヘルプトピック

現在選択されている要求に関連するヘルプトピックは、残念ながら今のところオンラインヘルプで利用することができません。Label Gallery のヘルプは、絶えずアップグレードされてます。ヘルプファイルの更新された新しいバージョンの Label Gallery ソフトウェアをインターネットからダウンロードできる可能性があります。

Label Gallery のウェブサイト <http://www.satoworldwide.com> にアクセスして、Label Gallery ソフトウェアのアップグレードが可能かご確認ください。

## 2.8 GalleryCommand

GalleryCommand は、DDE をサポートするほかのプログラムから Label Gallery を管理するために使用します。この場合は GalleryWatch です。

例:

```
LABEL "C:\LABELS\LABEL1.LBL"
```

```
SET Title = "何らかの文字列"
```

```
SET BarCode = "123456789012"
```

```
PRINT 10
```

```
FILECLOSE
```

C:\LABELS\LABEL1.LBL ファイルに保存されているラベルをロードし、変数フィールドの値を「何らかの文字列」に設定し、バーコードの値を「123456789012」に設定し、ラベルを 10 枚発行して、ラベルファイルを閉じます。

Label Gallery でサポートされる GalleryCommand のリストは以下のとおりです。

### 2.8.1 LABEL

```
LABEL <name_of_the_file>
```

作業中のラベルを開くコマンドです。ラベルがすでに開いている場合、そのラベルが使用されます。ファイル名とフルパスを記述することをお奨めします。

変数値にスペースまたはカンマが含まれる場合、パス全体を引用符で囲む必要があります (例: LABEL "C:\Program Files\SATO\Gallery\Labels\SAMPLE3.LBL")。

サービスモードで実行中の GalleryWatch で LABEL コマンドを使用する場合、割り当てられたドライブではなく UNC を使用します (例: LABEL "G:\MY LABELS\LABEL.LBL" ではなく "\\SERVER\MY LABELS\LABEL.LBL" )。

## 2.8.2 LABELCLOSE

### LABELCLOSE

現在有効のラベルを閉じるコマンドです。Label Gallery は開いたままになります。FILECLOSE コマンドでも同じ結果になりますが、動作に影響が生じます。ラベル発行の速度を上げるためには、このコマンドを頻繁に使用しないでください。Label Gallery の方が、より多くのラベルファイルを同時に開くことができます。ラベルをすでに開いている場合、ラベルをロードせずに、ラベル処理を迅速に実行できます。

## 2.8.3 SET

SET name=value\_of\_the\_variable, [,step[, quantity\_of\_repetition]]

名前は、ラベルで定義されている変数名です。ラベルにその変数がないと、エラーが発生します。Step と Quantity\_of\_repetition はオプションのパラメータです。これらのパラメータは、変数の増分と変更前のラベル数を通知します。

変数の値にスペースまたはカンマが含まれる場合、引用符でテキストを囲む必要があります。

## 2.8.4 SETPRINTPARAM

SETPRINTPARAM paramname=value

ラベル発行前に詳細な印刷パラメータを設定するコマンドです。

現在サポートされているパラメータは以下のとおりです。

PAPERBIN	使用する給紙トレイを指定します。プリンタに用紙/ラベル用トレイが 2 つ以上搭載されている場合、ラベル発行に使用するトレイを変更できます。  トレイ名はプリンタドライバから取得されません。
PRINTSPEED	印刷速度を指定するパラメータです。値はプリンタによって異なります。数値は、こ

使用のプリンタのマニュアルを参照してください。

**PRINTDARKNESS** 印刷の濃さとコントラストを指定するパラメータです。値はプリンタによって異なります。数値は、ご使用のプリンタのマニュアルを参照してください。

### 2.8.5 COMMENT

プログラムコードまたはスクリプトを開発する際に、コマンドに分かりやすい説明を追加することをお奨めします。時間が経過した後でコードを見直す際に、スクリプトが実行する内容を解読するために参照できます。

行の先頭にセミコロン (;) を使用します。その後のすべての文字はスクリプトのコメントとみなされるため、Label Gallery では処理されません。

### 2.8.6 PRINT

**PRINT** quantity [, skip [, identical label copies [, number of label sets]]]

**PRINT** は印刷を開始するコマンドです。最初のパラメータは、発行されるラベルの枚数です。

<number> ラベルの発行枚数です。

**VARIABLE** 変数には、発行されるラベルの枚数に関する情報を含んでいます。ラベルで定義したプロンプト変数か、またはデータベースからのフィールドです。

**UNLIMITED** データベースを使用して変数フィールドの値を取得する場合、無制限印刷により、データベース中にあるレコードと同数のラベルが印刷されます。データベースを使用しない場合、このオプションには意味がありません。その場合、感熱式プリンタ内部でサポートされるラベル最大枚数が印刷されます。

コマンドの「スキップ」パラメータは、ページ上でラベルの印刷を開始する前に除外するラベルの枚数を表すパラメータです。用紙にラベルを印刷する際に、このパラメータを使用します。ページの一部がすでに印刷されている場合、最初のラベルの開始位置をずらして、同じ用紙を再利

用することができます。このパラメータにより、ページ上にある未使用の残りのラベルを印刷することができます。

「ラベルのコピー」パラメータは、1枚のラベルの印刷枚数を指定するパラメータです。ラベルに、プロンプト変数またはデータベース変数がある場合、ラベル上の各レコードはここで指定された枚数だけ印刷されます。変数エレメントがないラベルがある場合、実際に印刷されるラベルの枚数は、quantity と identical label copies の各パラメータに基づきます。

「発行枚数」パラメータは、印刷処理を繰り返す回数を指定するパラメータです。

追加パラメータを設定する必要がない場合、以下のデフォルト値を使用します。

スキップ	0
ラベルのコピー	1
発行枚数	1

### 2.8.7 PORT

PORT <port\_name>

プリンタのポート名を上書きするコマンドです。次回、PRINT コマンドにより、指定されたポートで印刷が実行されます。

通常、このコマンドはラベルをファイルに印刷する場合に使用します。その場合、PRINT コマンドを使用する前に、port\_name パラメータでファイル名を指定する必要があります。

### 2.8.8 PRINTER

PRINTER <printer\_name>

通常、PRINT コマンドにより、ラベルファイルで指定されたプリンタを使用してラベルが印刷されます。このコマンドを使用してプリンタを上書きし、異なるプリンタを使用してラベルを印刷することができます。

プリンタ名にスペースが含まれる場合、引用符で囲む必要があります。

printer\_name には、SATO Label Gallery Plus アプリケーションのステータスバーに表示されるシステムプリンタ名を常に指定します。通常、システムプリンタ名は、コントロールパネルのプリンタフォルダにあるプリンタと同じ名前です。ただし、ネットワークに接続されたプリンタを使用している場合には異なります。この場合は、プリンタに分かりやすい名前ではなく、"\\server\share" 構文を使用します。

### 2.8.9 PRINTJOBNAME

PRINTJOBNAME <job\_name>

PRINT コマンドを使用するときに発行マネージャが使用する発行ジョブ名を指定します。発行後、名前は標準の状態に戻されます。

変数の値にスペースまたはカンマが含まれる場合、引用符でテキストを囲む必要があります (例: PRINTJOBNAME "Label for printing")。

### 2.8.10 LOGIN

LOGIN <username>

Label Gallery プログラムへのログイン手順を実行します。これは、Label Gallery へのログインが要求される場合に必要です。

**NOTE.** これは DDE コマンドで、ジョブファイルでは使用できません。

### 2.8.11 RETURN

ラベル発行後、Label Gallery プログラムに戻るコマンドです。

### 2.8.12 QUIT

ラベル発行後、Label Gallery プログラムを停止するコマンドです。アプリケーションは終了します。

### 2.8.13 MESSAGEBOX

MESSAGEBOX message [, caption]

メッセージを印刷します。2 つ目のパラメータは、メッセージのダイアログボックスのタイトルを表します。

変数の値にスペースまたはカンマが含まれる場合、引用符でテキストを囲む必要があります (例: MESSAGEBOX "Insert labels in printer", Warning)。

### 2.8.14 CREATEFILE

CREATEFILE <name\_of\_the\_file>

Label Gallery の内容を使用してファイルを作成するコマンドです。

ファイルを作成または削除する目的は、クライアントアプリケーションについて印刷を停止するかを通知することです。

例えば、ファイルからの印刷などの例があります。最初に、アプリケーションにより、ラベルの変数データが特定のファイルに準備されます。Label

Gallery が有効になり、印刷が開始されます。印刷処理が終了したことをアプリケーションに通知するため、データを含むファイルが最後に削除されます。これは、新規の「ジョブ」が開始したことをアプリケーションに知らせるシグナルです。

#### 2.8.15 DELETEFILE

DELETEFILE <name\_of\_the\_file>

ファイルを削除するコマンドです。

参考

CREATEFILE

#### 2.8.16 SESSIONSTART

3 つのコマンド (SessionStart、SessionPrint、SessionEnd) はすべて使用されます。通常の SessionPrint コマンドを使用すると、プリンタに対して完全なデータストリームが毎回送信されます。複数の印刷コマンドを 1 つのデータストリームにまとめたい場合、SessionStart コマンドの後に任意の数の SessionPrint コマンドを使用し、最後に SessionEnd コマンドを使用します。SessionEnd コマンドが発生するまで、ストリームは閉じられません。これらのコマンドにより GalleryCommand を使用して最適な印刷が実行されるため、各発行セッションに対して完全なデータストリームを生成する必要はありません。

#### 2.8.17 SESSIONPRINT

SESSIONPRINT quantity [, skip]

この機能を使用して、データストリームをプリンタに送信します。複数の SessionPrint コマンドを順次使用して、1 つのデータストリームに結合することができます。SessionEnd コマンドが発生するまで、ストリームは閉じられません。quantity と skip のパラメータの意味は Gallery Command の PRINT と同じです。

#### 2.8.18 SESSIONEND

データストリームを閉じます。

#### 2.8.19 OEMTOANSI

OEMTOANSI ON|OFF

このコマンドは SET コマンドと連動して機能します。このコマンドにより、SET コマンドの後のテキストが正しいコードページに割り当てられ、変数に正しい値が提供されます。

この GalleryCommand をジョブファイルで使用して、SET コマンドの後の値を正しいコードページに割り当て、印刷時、Label Gallery に対して正しい値を送信します。

## 2.8.20 SETDATABASE

SETDATABASE <database\_name> = <value>

database\_name プログラムで定義された、現在使用中のデータベース名

value データソースとして使用する新規のテーブル名

このコマンドを使用すると、デザイン時にラベルファイルに接続されたデータベースの代わりに、ラベルファイルを持つ別のデータベースを使用できません。

別のデータベースはラベルの発行時のみに使用され、ラベルファイルは元のデータベースに接続されたまま影響はありません。

## 2.8.21 SETTABLE

SETTABLE <table\_name> = <value>

table\_name プログラムで定義された、現在使用中のテーブル名

value データソースとして使用する新規のテーブル名

このコマンドにより、デザイン時にラベルファイルに接続されたテーブルの代わりに、ラベルファイルを持つ別のテーブルを使用できます。

別のデータベーステーブルはラベルの発行時のみに使用され、ラベルファイルは元のテーブルに接続されたまま影響はありません。

新規データベーステーブルは、元のテーブルと同じ種類である必要があります。例えば、テーブルを dBase から Paradox に変更することはできません。新規のテーブルの構造は元のテーブルと同じでなければなりません。

ラベルにすでに接続されているデータベースのテーブルや、完全に異なる別のデータベースのテーブルを使用することができます。

GalleryCommand に関する詳細情報は、Label Gallery のマニュアルまたはヘルプファイルを参照してください。

## 2.9 コマンドラインパラメータ

コマンドラインパラメータを使用すると、プログラムの開始後、すぐにアドバンスコマンドが GalleryWatch に渡されます。

パラメータはプログラムのファイル名の後に追加されます (例: C:\Program Files\EuroPlus\LabelGallery\Bin\GWatch.exe <parameter>)。

使用可能なパラメータは以下のとおりです。

/START	起動時にトリガーを有効にします
/STOP	起動時にトリガーを無効にします
/M	標準のウィンドウではなくトレイバーでプログラムが起動します
[configuration file]	デフォルト環境設定ファイル (C:\My Documents\GWatch.nwc) の代わりに使用する環境設定ファイルを設定します
[labels directory]	ラベルファイルが存在するディレクトリ (C:\My Documents\Labels) を設定します



## 3. 用語集

### トリガーイベント

GalleryWatch がラベル発行などのアクションを実行する前に発生すべきイベントです。イベントには次の 3 種類があります:ファイル、E-mail、COM ポート。

ファイルトリガーイベントは、指定されたトリガーファイルを変更または作成すると発生し、E-mail トリガーイベントは新規の E-mail を受信すると発生し、COM ポートトリガーイベントはコンピュータの通信 (COM) ポートでデータを受信すると発生します。

### ジョブファイル

ASCII のテキストファイルで、実行される Label Gallery コマンドが含まれます。通常、ジョブファイルはラベルのバッチを発行する場合に使用されます。

### トリガーファイル

GalleryWatch は、トリガーファイルが変更された日付と時刻をモニタし、トリガーファイルの時刻がアクションを最後に実行した時刻より後であれば、アクションを実行します。ファイルの日付と時刻を変更することを「ファイルを修正する」といいます。ファイルを修正する 1 つの方法は、MS-DOS コマンド REM>trigger\_file を使用する方法です。

### DDE

ダイナミックデータ交換 (Dynamic Data Exchange)。Windows アプリケーション間で通信を可能にするプロトコルです。アプリケーションを使用するには、このアプリケーションが DDE をサポートしている必要があります。DDE コマンドを使用して、1 つのアプリケーション (例: Label Gallery) を別のアプリケーション (例: Microsoft Access) で管理することができます。